第４１回　歴史探訪会ご報告

実施日　　平成 26 年 9 月 24 日（水）
場　所　　藤井寺市・羽曳野市
案内者　　内海春樹（２５７９）

「古事記シリーズ　ヤマトタケルゆかりの地を巡る」

台風 16 号の接近で朝からどんよりした天気ではあったが、集合場所の近鉄南大阪線　道明寺駅には 17 名が集った。

まず、案内者より羽曳野周辺の歴史についての説明がある。
石川、大和川周辺の丘陵地帯は、
・約２万年前の旧石器時代から人が住み、
・弥生時代には農業を基本とした集落が数多く形成された。
・古墳時代には堺市の百舌鳥古墳群と双璧をなす巨大古墳群が造営された。
・奈良時代には仏教文化の中心地となり、難波宮から大和の飛鳥京をむすぶ竹内街道が通り多くの寺院が作られた。
・１１世紀前期、源頼信が河内の国司に任じられて以来、頼義・義家の３代が河内源氏としてこの地を治め、また源頼朝は全国平定の記念として誉田八幡宮に神輿（国宝）を寄進している。
・ 江戸時代になると河川の改修工事や新田開発が行われ綿花の栽培が盛んになり河内木綿を中心に繁盛ぶりを示した。

道明寺天満宮への参詣道は門前町の商店街になっており、朝から賑わっている。

１．　道明寺天満宮　（ご祭神は菅原道真公、他）

本殿をお参りした後、宝物館で若い神官から道真公にまつわる話や宝物などの説明を受ける。

この地は、菅原氏・土師氏の祖先に当たる野見宿禰の所領地で、仏教伝来後、土師氏の氏寺として土師寺が建立された。（７世紀）

平安時代、土師寺には菅原道真公の叔母に当たる覚寿尼公が住んでいた。延喜元年（901 年）、道真公が大宰府に左遷される途中にも立ち寄って、覚寿尼公との別れを惜しんだ。

道真公遺愛の品と伝える硯、鏡等が神宝として伝わり、6 点が国宝の認定証と共に展示されている。

　宝物館の横には、珍しい古代の巨石を運ぶ「修羅」が展示されていた。
これは、藤井寺三ツ塚古墳から発掘された「修羅」を復元されたもの。
アカガシの二股に分かれた一木で、全長 8.8M、幅 1.9M、重量 2 トンと巨大だ。
法隆寺昭和大修理や薬師寺伽藍復興をした“昭和の棟梁　西岡常一氏”が
復元制作した貴重なものである。

　また広い境内にしめ縄を支える一対の大きな石柱が目につく。これには

“神になった道真公が、この世が明るく清らかに繁栄する事を祈ってくれている”、と称える文字が彫られている

２．　誉田御廟山古墳　（こんだごびょうやまこふん）

大阪府羽曳野市に所在する古市古墳群の中心になる古墳。約 420M の墳丘の長さは、百舌鳥古墳群の大仙陵（仁徳天皇陵）に次ぐ巨大前方後円墳である。現在、宮内庁によって第 15 代応神天皇陵と定められている。また、ここからは、色々な埴輪や土製品　木製品など副葬品が非常に多く見つかっている。正面拝所から見る御陵の風景は、お堀のむこうに木々に覆われた大きな山の様な姿で神々しさを感じさせる。

ここで、実在性が濃厚な最古の天皇との説が高い応神天皇の生涯や、御陵の入り口にある“宮内庁書陵部”の役割、“陵墓”などについて説明をうける。

次の見学場所までは大きな古墳に沿った地道で、周りには美味しそうなイチジクや白い綿花のお花畑を見ながら進む。

３．　誉田八幡宮（ご祭神は応神天皇・仲哀天皇・神功皇后）

宮司さんの案内で宝物館に入る。社伝では、571 年欽明天皇の命により、応神天皇陵の前に社殿を建立したのに始まるとしており、そこから「日本最古の八幡宮」を称している。今でも毎年 9 月 15 日の秋の例祭で、お神輿が天皇陵へ渡御する神事が厳粛に行われるとの事。天皇陵と八幡宮の境は石造りの太鼓橋で区分されている。また、日本で最も古い”ダンジリ“も展示されている。これは岸和田などの“ダンジリ”の原型となったもの。

八幡神は源氏の氏神とされ、源頼朝が征夷大将軍になった時、お礼に誉田八幡宮へ神輿を奉納している。（国宝）　その後も、源氏姓を名乗る歴代の将軍をはじめ、豊臣家、徳川家からも庇護を受け続けた。
宮司さんのご厚意で、休憩所で昼食とする。

４．　野中寺　（やちゅうじ）

伝承では聖徳太子建立 48 寺院の一つとされ、太子の命を受けた蘇我馬子が開基とされる。また「上之太子」の叡福寺、八尾太子堂の「下之太子」大聖勝軍寺とともに三太子の一つに数えられ、「中之太子」と呼ばれている。
境内に残る礎石から、飛鳥時代～奈良時代　前半には大規模な法隆寺式伽藍が存在したことは明らかで、渡来系氏族の船氏の氏寺として建てられたという説もある。
塔の礎石には亀の顔や手足が彫られ、芯柱の穴は“橘”の形をし、穴の内側には更に“舎利”を入れる穴がある。
広い墓地の奥には、お染、久松のお墓がある。墓石の裏には「享保七年十月七日建立・大阪東堀天王寺屋権右ヱ門」とあり、天王寺屋は油屋の豪商で死んだ二人の十七回忌に建立されたもの。

５．　<u>翠鳥園遺跡</u>

歩いていると住宅街の中に突然、コッペパンを包丁で切ったような、大きな石器のモニュメントと広場が現れる

今からおよそ 2 万年前の石器作りの跡が、当時の状況そのままに 30 ヵ所以上も発見された。石器作りの跡にはおびただしい数の石のかけらが残され、中には石が飛び散ったようすから、作り手のいた場所がわかるものもある。

石器の材料になった石は二上山の麓でとれるサヌカイトで、5km ほどの道のりを運んできたもの。するどく割れるサヌカイトの特徴を生かして、先の尖（と）がったナイフ形石器が主に作られていた。
当時それを使って獲物を仕留めたり肉を切っていたと考えられる。
出土したのは 500 点以上の石器のほかに、石器を作る時に出た 2 万点以上の石のかけらである。これらを接合すると、割る前の元の石の姿を復元することができ、旧石器時代の石器の作り方を、詳しく知ることができる。
旧石器時代の遺跡としては国内最大級。

サヌカイト

サヌカイトが生まれたのは、今からおよそ1,200万年から1,500万年前のことです。火山の噴火の際に地球の内部から噴き出た溶岩が、地表の近くで急激に冷やされて固まったもので、ち密で硬い特徴をもった岩石です。もともとの色は真っ黒ですが、風化した石の表面は灰色に見えます。

翠鳥園遺跡の東７kmにそびえる二上山の周辺は、近畿地方で最大のサヌカイト産出地として知られています。この他、岐阜県の下呂や広島県の冠山、香川県の金山・五色台、佐賀県の多久など、西日本にいくつかの産出地があり、サヌカイトの名も讃岐（香川県）に由来してつけられました。

６．　ヤマトタケルノミコト陵（古事記　「倭建命」、日本書紀　「日本武尊」）

羽曳野市のほぼ中央、羽曳野丘陵から東に延びる丘上に築かれた古墳時代中期の大型前方後円墳である。
現在宮内庁によって日本武尊白鳥陵に定められている。
墳丘規模は墳丘長 190m、後円部直径 106m、前方部幅 165m、くびれ部北側には造り出しを持っている。
周りには幅 30 から 50mの周濠が巡り今でも水を湛え静寂な雰囲気を醸（かも）し出し典型的な前方後円墳の美しい姿を保っている。

日本書紀などによると日本武尊は景行天皇の息子で九州の熊襲、東国の蝦夷を討伐した伝説の英雄である。
「遠征の帰り道、伊勢の能褒野（のぼの）で亡くなり白鳥となって大和琴弾原（ことひきはら）を経由して古市に降り立った。その後また羽を曳くように天に向かって飛び去った」と伝えられ、“羽曳野市”の名前の由来となっている古墳である。

辞世の句

“倭は　国の真ほろば　たたなづく　青垣、

山隠れる　倭しうるはし”

心配された天気も最後までもってくれ、暑くもなく寒くもなく、金木犀の香りを感じながらの歴史探訪会になりました。